

『心象録』

世界が、私たち二人だけになったような、空虚な場所。

白い花が辺り一面を覆う程に埋め尽くし、あたかも雪原のようになっていた。

咲き乱れるそれは彼女が好きだった花、オーニソガラム・ウンベラタム。別名ベツレヘムの星。

“純粹”や“才能”といった花言葉を持つその花は、まるで彼女そのものだ。

分厚い雲の隙間から僅かに太陽の光が差しているような、あるいは夜中の人工的な光のような、昼か夜かさえ曖昧な光景。

現実感を欠いたその場所で向かい合う私と彼女。私たちは二人とも高校生の頃の姿をしていた。大人びた印象だった彼女がこんなにもまだうら若い少女だったのだと改めて思い知る。

彼女は何も言わずに静かに私の目を見ている。その目はあの頃と同じ、全てを見透かす冷たい水晶のような瞳と強くて優しい眼差し。

私は茫然として口を噤んでしまっていた。

早く何か言わないといけない。時間はもう残されていない。そんな気がしているのに。

だが、積もり積もったこの感情を、これまでの後悔を、どう形にすればいいのか、どう伝えればいいのか、私にはわからなかった。

感謝の言葉も、謝罪の言葉も、どれも正しくもあるし間違いでもある気がした。言いたいことは沢山あるのに、何も言えない。

柔らかな風が制服や髪、足元の花達をそっと揺らす。

滲む視界。

言い表せられない感情が形となって、頬を通っていく。泣かないようにと思えば思う程に、堪えようと思う程に、それを抑えることができずに零れていく。

彼女はそんな私を安心させるように優しく微笑んだ。

ベッドのヘッドボードから伝う携帯電話の振動で目が覚めて、私は身を起こす。さっきまでの夢を、私は何度も見てきたような気がする。後悔なのか、懐旧なのか、忘れられない過去への憧憬の情が、私の心象を覆っていて、それがこんな夢を見せるのだろう。

まばたきをして、自分の頬に涙が伝うのに気づく。誰に見られているわけでも無いのに、人目を気にするように涙を指で拭う。無心でその指が乾いていく様子を眺めていた。

まだぼやけた視界の中、時計に目をやる。もうじき正午だ。

夜明け頃に眠るようになったのはいつからだろう。会社を辞めてからもしくは、体に染み付いていた朝に起きるという習慣が抜けることはなかった。音楽が本格的に仕事となってからは、曲を書いていたら気付けば日が昇り始める時間帯になっているなんてことも増えた。そしてそれとは関係無しに、ただ単純に眠れないことも多くなっていた。

先ほど携帯電話が鳴っていた事を思い出して、急いで確認する。着信とメールが一件ずつ。マネージャーからの、打ち合わせが急遽決まったという旨の連絡だった。

顔を洗って、とりあえず食事をとろうと、食パンをオーブントースターに入れてタイマーをセットする。そしてコーヒーマシンを淹れる為にお湯を沸かす。

予め温めたドリッパーにフィルターをセットし、一杯分の粉を入れ、軽く揺らして粉を平らにする。ドリップポットに移したお湯を、円を描きながら垂らすように注ぎ、全体を濡らして暫く蒸らす。それから数回に分けてお湯を注ぐ。寝起きにコーヒーマシンを飲む習慣が出来てから数年この行程を欠かしたことはほとんど無く、目覚めの儀式のようなものとなっていた。会社を辞めてもこの日課だけは変わらなかった。

トーストを齧りながら、ふとテーブルに置かれた食パンの包装に書かれた賞味

期限の表示を見ると、ちょうど今日の日付になっているのに気づいた。まだ残り二枚あるというのに、困った。普段から期限内に食べ終わっているが、残ったのは仕事の都合で外泊した日や、朝食をとる時間の余裕が無い日があったせいだ。こうした些細なところで、忙しさによって自分の生活に乱れが生じているのを感じる。食パンなら賞味期限が少し過ぎたところで食べられるだろうと考えるのは貧乏性過ぎるだろうか。メーカーの検証結果より期限が短く設定されているとどこかで聞いたが、それを信じて明日も食べることにしよう。

どんなものも時間が過ぎれば価値が無くなるのだろうか。作品にも賞味期限はあるだろうか。いや、無い。何世紀も前の絵画や音楽といった芸術が、今もなお人々を魅きつけるのだから。

だが、創造においてはどうかだろうか。未熟な技術や感性や知識のもとで、感覚の赴くままに生み出されたものというのは、不思議と力がある。多くの共感を得られるものが、世間では才能と呼ぶ。共感と普遍さは紙一重にある。獨創性というのは、突き詰める程に理解から遠くなる。しかし普遍性も突き詰めていけばほんの面白味の無いものになるだろう。

学び、育つというのは、同時に老いていくことに近い。多くを知れば、均された感性となってしまうのではないか。そこに光る作品はあるのだろうか。

そうして生きていくうちにいつしか何かを失っていくのなら、創造や創作には賞味期限があるのかもしれない。

ならば私はどうなのだろう。明日の私に価値はあるだろうか。わからない。そんなことを考えながら、残りのコーヒーを飲み干した。

事務所での打ち合わせは一時間程で終わり、関係者の方々を見送ったあと、私はロビーの座椅子に腰掛け、自販機で買った飲み物を口にしながら一息ついた。た。

会社員時代から未だに、大勢での会議や打ち合わせというのは慣れない。

関わる人が増えていく度、シンガーとしての自分の存在が着実に大きく成長していることを実感し、身が引き締まる。

「お疲れ〜！」

「お疲れ様です」

元気よく声をかけてきたのはマネージャーの持田さんだった。背が高く、いつも髪を後ろに束ねている外見も内面も快活な印象の女性。この人とは事務所に入ってから現在まで五年近くお世話になっている。

そんな彼女との数分間に及んだ談笑の終わりに、思い出したように彼女が言う。

「あ、そうだ。はい、これ。来てたよ〜」

持田さんが差し出してきたのは封筒の束。いわゆるファンレターだ。

「ありがとうございます」

「いや〜、ここ数年でファンレターも増えたねえ。自分のことのように嬉しいよ」

彼女の言葉で、初めて自分がファンレターを受け取った時のことを思い出してしまい、少し気恥ずかしくなる。その時は嬉しさの余り感極まり、堪らず泣いてしまったのだ。こんな自分に、言葉を綴ろうと思ってくれた人がいるという事実が、本当に嬉しかったのだ。

受け取った手紙には昔から送ってくれている方や、初めて見る方の名前がある。

私は本当にたくさんの人達に支えられているのだと、改めて思う。今度の公演も必ず良いものを披露しよう。

そんなことを考えながらそれらを順番に見ていると、見覚えのあるデザインの封筒が出てきた。

「えっ…」と思わず声を洩らす。

私の心臓が驚掴みにされたように縮み上がる。

偶然だ。そうに違いない。

音が聴こえてきそうな程に、胸が早鐘を打つのを感じながら、恐る恐る差出人の名前を見る。

そこには紛れもなく、

あの人の……彼女の字で、

彼女の名前が書いてあった。

彼女からの手紙を握り締めながら、人が疎らな鉄道車両の窓側の席に私は座っていた。

眺める景色から少しずつ大きな建物が減って行って、栄えた都会から故郷へと近づいていくのを感じていた。それと同時に、あの頃の記憶が滔々と駆けめぐる。それはもう何年も前のはずだったが、懐かしいものではない。いつだって忘れたことは無かったのだから。

張り詰めたスチール弦の擦れる音。薄暗い校舎の塔屋。ペトリコールが漂う混凝土。轟しい踏み切りの警鐘。雨に濡れた廃線。煤けた病棟。空を分断して聳える送電鉄塔。夕暮れのバス停。止まったままの観覧車。

どこにでもある、ありふれた光景。自分を取り巻く世界は緩やかに動いていたのに、変わらない日常が延々と続くと思いついていた。

今もあの頃のことばかりを綴ってしまうのは、未だ私は前を向けていないからだ。

思い出の中を生き続けるのは、きっとさよならを言えていないからだ。

あの日の天気予報を知っていたら、あの時間のバスに乗らなかつたら、それだけで全てが違っていたのかも、今になって思う。

それは間違っていたのだろうか。正しかったのだろうか。

まあ、たればなんていうのは本当に意味が無い。あれこれ想像に耽ったところで過ぎたものは何も変わらないのだから。だのに人が懲りずに空想してしまうのはきつと、現状を歎じているか、己の選択が眩としたものだと思いたいからだ。

それでも私にとって、新しい世界の始まりはあの時からだった。

彼女と過ごした一年半の出来事が、映写機からスクリーンに映し出されるみたいに鮮明に目の前に浮かぶ。その記憶の映像は私と彼女を少し離れたところからファインダーを覗くように眺めている。襟首辺りの長さで切り揃えた髪型の少女と、濡れた鴉の羽を思わせる美しい黒の長髪をした少女。二人は一台のピアノの前に並んで座って鍵盤を鳴らす。

彼女と初めて会った日のことを、私はよく覚えている。彼女と会わなければ、あの日は何の変哲も無い、ただ過ぎていくだけのありふれた日常の一片でしかなかったと思う。

歩き慣れた道から見える景色ですら、聴き馴染んだ曲の歌詞ですら、よく知っている物語ですら、彼女と出会ってからは違ったものになった。

歌も、言葉も、人生の価値も、笑い方も、嘘も、優しさも、生き方も、彼女が教えてくれたその全てが今の私を創っている。

彼女は間違いなく、私の世界を変える一因だった。

いや、今でも彼女は私の世界の全てと言える。